



石井 亨/ Toru Ishii, *Going Work Battle 08*, 2019, H54.3×W54.3 cm/ H21.3×W21.3 inches, オーガンジー絹に糸目友禅染、
フォイル、パネル/ Itome Yuzen dyeing on organdy silk, foil, wood panel

艸居 Annex 7月展覧会

『クオリア: Qualia』

出展作家 (50音順): 石井 亨 堀江 美佳 ミリアム・メチタ 尹 熙倉

2020年7月14日(火) - 8月8日(土)

艸居Annex

〒604-0924 京都市中京区一之船入町 375 SSS ビル 3F

開廊時間: 10:00AM-6:00PM 定休日: 日・月

現代美術 艸居 〒605-0089 京都市東山区元町 381-2
Sokyo Gallery 381-2 Motomachi, Higashiyama-ku, Kyoto, Japan 605-0089
T: 075-746-4456 F: 075-746-4457 info@gallery-sokyo.jp www.gallery-sokyo.jp



プレスリリース

この度、現代美術 艸居では4名の作家による平面作品の展覧会「クオリア: Qualia」を艸居 Annex にて開催致します。「クオリア」とは主観的に体験される個々の感覚のこと、感覚的・主観的な経験に基づく独特の質感のことを言います。日本語では感覚質と訳されるこの現象は主観内のみ現れ、客観的なデータへ置き換えることが出来ません。本展では陶の粉末や川の砂を素材として抽象画を制作する尹熙倉や、織物を媒体とする石井亨、和紙にブループリントを写し出す堀江美佳の作品、また、奇怪な動物やギリシャ神話などをモチーフに陶やガラスなどの彫刻作品を制作するミリアム・メチタは、今展では強烈な赤色のドロイングを展示致します。作品を独自の技法で表現する作家のクオリアを感じると同時に、鑑賞者が作品から受け取る自分自身のクオリアも感じていただける機会となれば幸いです。

「現代の浮世絵師」とも呼ばれる石井亨。日本唯一の伝統技法である糸目友禅染を用いて現代社会をユーモラスに風刺します。「糸目友禅の要素には日本美術の特徴的な平面性、輪郭線、にじみやぼかしといったものが内包されている。この技法を日本人である自分が使うことで、西洋の現代アートで展開されてきたものの日本的な解釈を可能にするのではないか。」と石井は言います。今回展示される作品は、明るい色彩で表現された侍姿のサラリーマンシリーズ、旅先で出会ったゴミのシリーズ、そして近年取り組み始めた Humidity シリーズを展示致します。

堀江美佳は自身で作成した和紙を印画紙とし、撮影した写真をプリントするという独自のスタイルで制作活動に携わっています。雁皮（がんび）という植物を和紙の原料に、日本の美しさを表現する作品を生み出します。和紙の原料の雁皮の採集、皮を剥いての生成、漉いて和紙にするまでの工程を全て自身で行い、最後に写真を青一色で印刷します。彼女は青に、海、空、そして宇宙といった生命の源を見出し、人間の心にある静寂さ、人間の不完全性、繊細な可笑しみを青という色とリンクさせます。堀江が捉える風景はどこか訪れたことがあるようなノスタルジックなものが多く、ふと懐かしい思い出の場所に行ったような気持ちになります。現在ではアメリカを中心に欧米にファンを多く抱え、本拠地である日本でも認知されるようになってきました。

近年は陶やガラスを素材とした彫刻の多いミリアム・メチタ。目のない鳥や、人間と植物を掛け合わせた作品など彼女独自の世界を表現します。本展でご紹介する作品は鮮烈な赤色で描かれたドロイングです。写実的に描かれたうさぎの周りに黒色の斑点が散っているこの作品はメチタがニューヨークに移り住んだ際に精神的に極限においやられた状況で描かれた作品です。メチタは次のように述べています。「生、死、苦痛、楽しさは日常において互いに衝突する矛盾した概念で、私の作品はいつも矛盾しています。…私が興味を持っているのは、物事の外見と一見隠されているものとの間の緊張です。私は常に洗練と過激主義の間で揺れ動いて



いて、この極端なものをどのように組み合わせるかを理解しようと努力しています。」彼女の独特の作品の中で生と死は融合されることにより、矛盾から抜け出して、また新しい一つの概念を形成します。

尹熙倉の陶粉画は陶で作った立体彫刻の表面を削り、砕いた粉で平面に描くことから始まりました。「何か」と題された作品は作家が「『ある』の風景」と呼び、物事の「ある」と「ない」という存在の曖昧さを提示した作品です。2011年から取り組んでいる「Sand River Work」は人間の文明を遡るべく、テムズ川、セーヌ川、鴨川、揖保川、淀川などの川で砂を採取し、抽象的な風景を描きます。各地で直接採取した川の砂を窯で様々な温度で焼き分けることにより多様な色を作り出し、さらに細かく砕かれた砂は独特の質感や感触を風景の中に視覚を通して伝わってきます。本展では「何か」の作品2点と、鴨川の砂、セーヌ川の砂を用いた作品を展示致します。陶の材料である土や川の砂は川に流されて積み重なり、その上にさらに積み重なるようにして町が出来上がります。彼は堆積していく土や砂のそのような性質の中に人、もの、情報の動きを見出し、その間の時間の流れや移ろいを表現します。

「太古から変わらない時間の中で、Sand River – 砂もまた流れ続け、人の営みと共に風景を作り上げてきた。川の砂を焼いて絵を描くことで、風景の本質に触れることができるのではないか。」—尹熙倉

作家紹介 (50音順) :

石井亨 (いしい・とおる)

1981年静岡県生まれ。2006年東京藝術大学美術学部工芸科染織専攻卒業、2008年チェルシー・カレッジ・アート・アンド・デザイン修士課程、テキスタイルデザイン科交換留学(ロンドン、イギリス)、2010年東京藝術大学大学院美術研究科工芸科染織専攻修了、2014年東京藝術大学大学院美術研究科美術専攻博士後期課程修了。現在、埼玉県にて制作。受賞歴は2007年第8回スパイラル・インディペンデント・クリエイターズ・フェスティバル 審査員奨励賞、2011年イセ・カルチャー・ファンデーション・学生美術展覧会 デイビッド・ソコ賞、2013年2013年度博士審査展 野村賞、2017年 The Annex Collection Acquisition 入選。収蔵先に東京藝術大学美術館(東京)、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館(ロンドン、イギリス)、モリカミ美術館(マイアミ、アメリカ)。

堀江 美佳 (ほりえ・みか)

1984年京都府生まれ。2007年京都造形芸術大学情報デザイン学科卒業、2008年ロンドン、キングストン大学ヨーロッパ美術実技(ファインアート)修士課程で学ぶ。2013年加賀市に自身のスタジオを設立し、和紙と青色の写真表現の原始的な情熱と美的価値の追求を始める。日本、



韓国、ベルギー、オランダ、イギリスでの展示経験がある。

ミリアム・メチタ (Myriam Mechita)

1974年フランス、ストラスブール生まれ。ストラスブール芸術大学でDNSEPを取得後、CFPI (プラスチック芸術トレーニングセンター)を卒業。シェルブール、カーン芸術メディア高等学校で美術実技を指導。ベルリンで制作活動。アーティスト・イン・レジデンスの経歴に2006年ケベック、2006年から2011年セーヴル、2011年ニューヨーク、2015年リスボン、2017年アデレードがある。ヨーロッパ、特にフランスを中心に数多くの個展、グループ展を開催し、精力的に活動。主な収蔵にはミュージアム・オブ・アーツ・アンド・デザイン (ニューヨーク、アメリカ)、セーヴル陶磁器美術館 (セーヴル、フランス)、近現代美術館 (ストラスブール、フランス) など。

尹 熙倉 (ゆん・ひちゃん)

1963年兵庫県生まれ。1988年多摩美術大学大学院美術研究科修了。1995年文化庁芸術家在外研修制度にてイギリスに1年間滞在制作。2010年文化庁新進芸術家海外研修制度の特別研修により大英博物館にて調査・研究。現在は多摩美術大学美術学部工芸科教授。主な収蔵先は寺田コレクション (東京)、東京オペラシティアートギャラリー (東京)、茨城県陶芸美術館 (茨城)、常滑市 (愛知)。旅客船「guntû (ガンツウ)」、兵庫大学4号館 (兵庫)、静岡県立静岡がんセンター (静岡) など。

是非、貴誌・貴社にてご紹介いただけますと幸甚に存じます。

掲載用、写真の貸出などご質問がございましたら下記までご連絡くださいませ。

プレス担当：元林久美子

〒605-0089 京都市東山区古門前通大和大路東入ル元町 381-2

motobayashi@gallery-sokyo.jp Tel: 075-746-4456 Fax: 075-746-4457